

がん、診断しながら治療

セラノティクス創薬 京都薬科大が研究

京都薬科大学は分子イメージング技術を応用し、治療と診断を同時に行える「セラノスティクス創薬」の研究に着手する。まずは5年以内に診断薬の臨床研究を始める計画。セラノスティクス創薬は住友化学とGEBへ

の身体の負担を軽減できることが期待されている。京薬大は大学内に構える放射性同位元素研究センターに最新鋭の単光子放射型コンピュータ断層撮影（SPECT）装置を導入。体内に投与した放射性薬剤から放出される放射線を特殊カメラで画像化し、血流量や代謝機能などを調べられるようにした。センターで扱う放射性同位元素も18

核種から60核種に増やした。同大のセラノスティクス創薬研究グループでは独自の開発手法や化合物ライブラリーを用い、乳がん、肺がん、膵がんなどを対象に診断薬と治療薬を開発する。それ以外にも日本医療研究開発機構（AMED）の支援の下、京都大学と前立腺がん治療を対象に共同研究に取り組み、ドイツの大学との共同研究も検討す

るなど、国内外で外部連携も積極的に行い、実用化を目指す。セラノスティクス創薬に近い治療法として、富士フイルムR1ファーマが実用化している「ゼウアリン」がある。リンパ腫の治療に用い、放射性薬剤を使って画像診断したうえで治療を行う。一方、セラノティクスは診断と治療を同時に行う。日本メジフィックスも研究開発を始めている。